

横浜市小学校社会科研究会

4 学年部会

研修会記録

第 8 号

令和6年 3月 日

横浜市小学校教育研究会

会長 濱田 哲也

横浜市小学校社会科研究会

会長 加藤 和之

同 学年部長 本間 宏志

【提案日時】

2月 14日 (水)

提案

本間 宏志 先生 (生麦 小)

下島 孝志 先生 (瀬ヶ崎小)

八木 浩司 先生 (南吉田小)

【会 場】

横浜市立平沼小学校

司会

下島 孝志 先生 (瀬ヶ崎小)

記録

佐藤 安世 先生 (北綱島小)

1 一年間の実践や授業研究会を振り返って(成果○と課題△) 4学年部会部長 本間 宏志 先生より提案

視点1 「子どもが問いや見通しをもち、主体的に学ぶ『単元づくり』」について

①社会的事象との出会い→単元を見通す学習問題→予想→学習計画

ポイント①教材研究：

◎学習指導要領の内容と子どもたちの実態把握から、どのような単元にしていくか、子どもの実態に合った学習になっているか考えたことで、教師自身の見通しにつながり、それは子どもたちが見通しをもって学習できることにもつながった。

ポイント②社会的事象との出会い：

◎調査活動、身近な材、問題意識を高める、比較など、実態に合わせた事象との出会いが子どもたちの問題意識につながり、追究意欲の高まりや追究の見通しをもちやすさにつながった。

△実態に合わせていくことの難しさがあった。実態に合わせた出合わせ方を工夫したり精査したりすることが、子どもの主体的な学びにつながっていく。

ポイント③予想から、学習計画を立てる：

◎「単元を見通す学習問題」に対する予想から、何を調べていく必要があるか(内容)だけでなく、どのように調べるとよいか(方法)も考えたことで、見通しをもって追究できる計画が立った。

②主体的な学びの原動力につながるような振り返り

◎何をどのように学んだか(内容と方法)という振り返りをくり返すことで、自らの学びのよさや成長を実感した振り返りが見られ、それが以後の学びの原動力へとつながっていった。

視点2 「個を生かし、協働的に学びを深める『授業づくり』」について

◎どの実践も、子ども一人ひとりの考えをしっかりとみとることができていた。その上での支援が子どもの姿に表れていた。(⇒実際に行った手だての例は、「4学年部会まとめ」を参照)

⇒12月授業研分析(北綱島会場) 4学年部会副部長 下島 OO 先生より提案

・一人ひとりの考えをみとり、本時をどのように進め問題解決に導くかを意図的指名で組み立てていた。意図的指名により、児童の見方や考え方を定めることができた、考えをより深めることができた、本時、活躍してほしい児童の出に用いることができた。一方で意図的指名が多くなり、教師→児童→教師のやり取りになってしまったことで、児童の発言でつないでいくことが困難になってしまったため、バランスをとって意図的指名をしていく必要がある。

・今回のように、教師が仲介して進めていき、対策同士の関係性に気づかせていくのも協働的な学びと言える。一方でより子どもたちが主体的に本音で意見を言い合える場面をつくっていく必要もある。

⇒12月授業研分析(白幡会場) 4学年部会副部長 八木 OO 先生より提案

・最初に、これまでの学習の振り返りから、本時の内容と方法を共有し、本時の見通しがもてるようにしていった。このようなことを積み重ねることで、子どもの思考が見える実践につながった。

・抽出児Bが発言した後、教師はB児を価値付け、いかそうとしたが、あの場面で教師が黙ったままでいたら、そのことによりB児の考えを全体に広げ、みんなの思考をゆさぶることもなった。全体に投げかけて、子どもたちの反応を見てもよかった。

・最後をグループでの話し合いとまとめにしていたが、グループワークのみとりが難しい。抽出児に絞ってみとめるのか、誰一人取り残さないための支援が必要な児童対応をしていくのか、今後考えたい。

2 一年間の実践や授業研究会を振り返って(成果○と課題△)の続きで

4学年部会部長 本間 宏志 先生より提案

△「みとりをいかす」ことこそが、そのゴールである「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」、そして「資質・能力の育成」につながっていたかという点まで検証しきれなかった。一部の子に観られた成果を「誰一人取り残さない」にまでつなげていくには、今後も効果的な支援の在り方を考え、子どもの姿から支援の効果を検証していく必要がある。

△みとりに基づいた「意図的指名」が、学びを深める上では有効な手立てとなる一方で、教師が自分の意図に沿って流れをつくってしまうこともある。子ども自らが協働的に学びを深められるような在り方も具境していく必要がある。

⇒実践から見えた協働的に学びを深める授業づくり・協働的な学びの在り方



3 「協働的な学びの在り方」についての意見交換

- ・「子どもの言葉」が子どもにとって一番わかりやすい。子どもが説明できる場をつくっていく。
- ・教師の教材研究で、子どもが主体的に学び、個が育つ。そのことにより、友達の意見をよく聴けようになり、気付けるようになることで、友達の意見につなげられ、全体として深まっていく。
- ・学習は、自分のためにやっている。「誰かの話が必ず役に立つ」という学ぶ姿勢を育てる。
- ・個のみとりは、教師の準備の中で子どもたちが安心して発言していける。
- ・座席表にまとめられなくても、日々のノート、ノート写真をロイロノートで蓄積、板書写真をロイロノートで蓄積など、できることを工夫しながらみとり、子どもの考えをつないでいけるようにする。
- ・日々のふり返りを次の学習のめあてにしていく、いかしていく、つなげていく。
- ・子ども同士で学び合う経験の蓄積をしていく。そのためにも、日頃の学級経営が大切。友達の話を聴き、意見をつなげられるようにしていく。
- ・体験活動や「選択・判断」できる終末など、子どもが「自分事」になっていける単元デザイン。
- ・子どもの自由に発言、つぶやき、対話ができる社会科の授業
- ・教師の「意図的指名」で児童の発言をいかし、価値付けていく。教師が子どもたちの「協働的な学び」のよさを子どもたちに価値付けていく、認めてあげることも大切。

<講師の先生より>西富岡小学校 校長 黒田 由希子 先生

- ・子どものみとりは、子どもの何をみとるのか、(問い、材に対する取組、学習全般、子ども同士の生活)、どうみとるのか(行動観察、発言、子どもの態度、ふり返りやノート)があるが、「子どもの言葉」を大切にしてほしい。子ども自身が学んでいること、学びたいこと、どう考えているのかは、「子どもの言葉」からしかわからない。そのためにも、見方をブラッシュ・アップしていく必要がある。子どもをみとるときに、教師も一緒に学んでいく姿勢を大事にしてほしい。
- ・協働的な学びは、子どもの学びはじっくり待ってあげなければいけない、環境の面でも保障しなければいけない。
- ・意図的な指名で広がっていくものがあるが、最終的には子どもたち自身が自分たち同士でつながることを目指すとすれば、友達の考えを事前に知らないでつなげ合うことは無理。教師だけが座席表をもって授業をしていくことがどうなのか。自らが相手の意見を知りたくなるような資質・能力が育っていくと、「協働的な学び」が深まっていくのではないか。

<講師の先生より>元石川小学校 校長 野間 義晴 先生

- ・視点①の単元デザインは、社会との関わりを考えなければならない。大切なのは、プロセス。みんながいるからわかるんだ、一人ひとりのみとりの在り方、
- ・視点②この子を生かすことは、集団をいかすことにつながるんだということは明らかになってきた。この子をいかすときの教師の出番はどこなのか
⇒思考を深めるための発問は、どうあったらよかったのか、意図的な指名、効果的な指名など
- ・先生が一生懸命だと、子どもたちは応えてくれる。どこかで一生懸命になると、必ず子どもは応えてくれる。